夕刊
磐城新聞
八月二十六日發行
(日曜祭日翌日休刊)

東北振興策に就て

貴族院議員 金成通

五

五月二十二日質問
豫算委員議事速記

東北の振興問題に就きましては過般來先輩各位に於きまして、極めて同情ある御論議があつたのでありまするから、蛇足のやうでありますが、私は東北出身でありまして、郷國の問題でありますので、甚だ迫つて居る會期に恐縮千萬に存じますが、一言お尋をして置きたいと思ふのであります

東北振興に就きましては恒久的と應急的との二つの方面から施設を要するであらうと思ふのであります。今期議會に御提案になり、既に決定されました東北振興に關する二つの會社の設立に關しまする法案の如きも、是は恒久的對策の一部門でありまして、即ち當局の御説明に仍りましても、發電所一部竣功致しまするのは、殆んど三年の後であると言ふことであります。而して全部完成致しますのは十年の後であると言ふことでありますが、之では窮乏と飢餓の界を彷徨しつゝある東北民を救ふのには誠に隔靴搔痒の憾を免れないと存ずるのであります

東北地方は兩三年冷害に仍つて米の收穫を妨げられ加ふるに未曾有の大降雪に遇ひまして、麥その他の農作物を始め數多の被害があつたのであります。即ち或山間に於きましては、積雪のため苗の播種に時機を逸してしまふ。又雪解の洪水により住宅、耕地の流失、道路、堤防の決潰等、その被害は言語に絶する有樣でありまして、關東の震災にも對比致しますやうな、實に慘憺たる災禍に悩んで居るのであります

是等の善後策をどうするか、即ち前述の如く降雪は雪解の洪水を伴ひ、その被害は第二段に想像も出來ない廣範圍に及ぶのであります斯樣な次第でありまして農村に於きましては二重にも三重にも困難を致して居るのであります

それで率直に申上げますならば、明日の大計劃よりは、今日の應急策、即効的の施設が、東北の農民に取つては緊急を要するのでありまして、是が東北に施すべき急務であらうと思ふのであります

鈴木傳明君

珠峯 小野務平

家在本門蘭若傍
園庭泉石趣殊長
漢君令譽馳天下
且頌人間不老郷

朝涼

清野重郎

○朝の間の涼しき庭にきのふ植ゑしつはぶきの莖は葉をもたげたり
○ちかき木に鳴きいでにける蟬の聲ひとしきりたかし日ざかりの庭
○たそがれの海のあやしさこくこくにかげらふ波のいろかわりつゝ
○闇のなかにあかき灯ともりし島のありさびしき影と見てすぎにけり
○音すればもろ聲あがるたまゆらを空にあかるく花火ちりけり
○池をめぐる木立の闇に浴衣白く花火見る人のゆきゝしげしも

五浦

島田忠夫

街なかの寺にも松が茂り
さうさうと松籟の韻けば
恰も海をちかく聽くやうに思へる
海といへば 常陸の海がおもへ
友人たちを集めたある夏の
三昧會のことなども偲ばれる
今は亡い老篤學者を招いて
潮ひびく五浦の岡倉天心別莊に
偕に臥ねともに食しつゝ
こゝろひたぶるな修業をした
若かつたが眞劍に溶へ
熱若だつたが矜度をてもち
私の傍らには みごもつた嬬もゐた……
貧しいから
その嬬は別れてゆき
無情な母の胎を出て 兒どもは死んだ
――數年を經たいま
私はこころも漸く平かに
絶えて亡兒も思はないが
あの松林の中の清閑な莊だけが戀はれる
この庭にも月見草が咲き
山百合が匂ひ
さうさうと松籟も韻く
たゞ潮の香がないから
目を閉ぢて杳かな海を戀ひ
おりおり 蟬の鳴く樹蔭に
寂しい過去を追憶する――

何處に

川名俊子

神よ何處に――
君が見失ひし日より
野にか
山にか
涙して喘――吾が心

笹の蔭から

有川富明

笹のかげから
ひきがへる――
ひとりてくてく
出て見たが
笹にやさらさら
風ばかり――
何處を向いても
まだ早い

8月27日

△月食に驚きアテネ軍敗北(前四一三)△貝原益軒歿す(正德四)△弓組を鐵砲組に改む(文久二)△安政大獄落着(安政六)

小説

高橋是清

(102) 松浦泉三郎作 佐々木今朝吉畫

轉變無限(二)

飜譯原稿は次々に發表された

最初に發表された時、謙澄は、西の内を横に二ッ折りにした半面新聞紙を懷中に、和喜次の部屋へ馳込んで來て

『おい、載つたぞ〳〵。見ろ、俺の書いたものが版になつたんだ』

言ひながら、狂氣して、部屋中を跳びまわつた

月、社へ行くと、南喜山が應待に出て

『實はまだどれだけ頂戴してあるか、計算未了なのですが、失禮ながら毎月御兩君の生活費用は、一體幾何位必要なのですか?』

と、質問した。和喜次が

『先づ二人で五十圓でせうな』

と、卒直に答へると

『さうですか、暫らくお待ちを』

言つて、一旦部屋を出て行つたが、直ぐに戻つて來て

『では五十圓だけ差上げる事に計ひましたから。それから今後の料金は、原稿掲載の如何に拘らず當分五十圓を一個月分として御支拂ひ申す事に決めましたが』

『結構です。異存はありません』

和喜次は答へた。異存どころか……と、謙澄は唾液を嚥んだ

『では』

南喜山は二人の前に、太政官紙幣五枚を、並べて出した

それを懷中にして表へ出ると、

『豫想外だつたな』

『流石に話せる』

二人は欣然と笑ひ交したが

『どうだ。これを機會に、一ッ何か共同で著述をやらんか?』

和喜次が言ふと

『贊成だ』

謙澄は直ぐに應じて

『ところで、今日の祝ひ典に前祝ひ、双方兼ねて宴とゆきたい所だな』

『宜からう』

『異論なしか』

『俺も暫らく痛飮せん』

『到頭本音を吐いたな。で場所は何處にする?』

『何處でも結構』

『では……と、おゝさうだ、いつそ兩國の水心樓とゆくか』

謙澄がしたり顏で言つた水心樓は柏屋の別名だつた

そして柏屋は?謙澄委細を既に知つてゐたのである

和喜次は苦笑して

『萬事任せる』

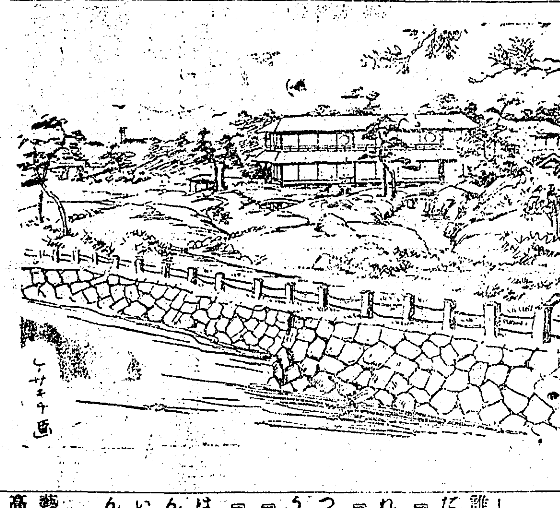
『胸が痛むか』

『梟迦な』

『矢張り引かれると見ゆる』

『嘲弄ふな』

『アッハッ……』



『ハッハッ……』

初夏に近く、晴れた日だつた

柏屋の庭には山吹が咲き紫陽花の蕾が膨らんでゐた

水鳥が輕々と身を飜して、川面に遊んでゐた。小舟を繰る船頭の唄か、ゆるやかに、斷續して聞えて來る

『矢張り季節としては、惡くない時期だな。久々でのんびりした氣持になれた』

廊下の手摺に寄つて、和喜次が呟くやうに言ふと謙澄が座敷から笑ひながら應じた

『季節も季節だが、場所も矢張り惡くはあるまいが』

『まだ言ふ氣か』

『思ひ出の地と言ふものは誰にしても、忘じ難いものだらうな』

『莫迦だな。然し末松、あれは日本橋、こゝは……』

『だが君のさうした道に入つた第一歩はこゝからだらう!』

『理窟を言ふな』

『どうも言ひたくなる。俺は田舎者で、まだ一度もそんな方面の粹事に經驗がないからな。ひがみかも知れん。ハッハッ……!』

哄笑した時、廊下傳ひに藝妓が二人、雛妓が二人、高聲で話しながら來たが和喜次を見ると

『まあ、橋さん!』

と、一人が意外さうに言つた

平町 磐城無盡
簡易ノ金融
共存共榮

夜間診療
胃腸 性病
内科 胃腸病科 花柳病科 性病科 皮膚科
專門
松村胃腸性病科醫院
(平町南町電一〇七番)
(見習看護婦募集)

◎日本石油株式會社特約店
ライジングサン石油株式會社重油特約店
關彰商店平支店
電話六一番
本店 水戸線下館驛前(電話五五・三三九番)
支店所在地
茨城縣土浦町田宿(電話六五三)
常磐線關本驛前(電話八二四)
常磐線四倉驛前(電話平潟五四)
久慈濱支店(電話四八)
小名濱支店(電話二三七番)
海上給油所及油槽所 大津、平潟、江名濱
營業種目
輕油、揮發油、モビール油、重油、マシン油、機械油類、植物油、胡麻油、種油、タール、カーバイト、石炭、コークス、ストーブ

耳鼻咽喉科專門
大和田醫院
平町南町一六番地
電一七〇番
(入院隨意 病室完備)

御進物には
鰹節に
鹽辛
魚問屋
平町四丁目 電二一三

食事、喫茶、酒場を兼ねた
夏のサロン
男給の店
平・田町・電三五二

藥品 百貨
福島縣平町二丁目
西村屋藥舖
藥劑士 鈴木堅助
電話三番
振替 東京六一二九九 仙臺一二〇一

自轉車・リヤカー
品質本位と正直な値段
フタバ商會
平・新川町郵便局前 谷屋呉服店トナリ

入院隨意(自炊の便あり)
外科專門
X光線科
平南町
上田醫院
病室完備
(電話一二九)

收入印紙賣捌
度量衡
モノサシ マス ハカリ
計量器
体温器 寒暖計
◎秤ノ取扱と修繕も致シマス
關内藥局
電話四〇番

外科一般 内臟外科
レントゲン科
北川外科
醫學博士 北川芳夫
平町新川町(諸橋醫院跡)
小林良次
(血液檢査每日)
イツデモ入院デキマス
電話四六四番

神佛祭葬具一式
造花製造販賣
引物一式取扱
其他旗類一式取扱
博盛堂
店主 松本幸松
平町搔槌小路一番地
電話(呼出)五三五番

大至急
會員募集
年齢、學歴を問はず堅實なる婦人を望む
上原家政婦會
平町紺屋町
電話二二番

實家ハ靜岡産地ノ茶問屋
生産家カラ直接需用家ヘ
香味自慢 生一本 小笠銘茶
安價提供 出來ル皆樣ノ店
買テ喜ビ賣テ喜ブ理想ノ店
卸小賣 大角園
平町搔槌小路

部落懇談會を開き 確固たる態度決定

出石本縣總務部長以下を招き 昨夜平町平窪代表合併座談會

平窪村に對し合併の觸手を延ばしてゐる平町では更に昨二十五日濱三郡町村長會の爲來平した出石本縣總務部長、東郷地方課長、會田屬の臨席を求め平窪村代表者との座談會を午後七時から町會議事室に開いた

兩町村の出席者は

（平町側）青沼町長 酒井助役 井上 野崎 萩原 馬闢内 坂本の各部長 目町議

（平窪側）草野村長 小泉助役 矢吹 小野 鈴木高萩 鈴木勇 吉田 矢吹長

の諸氏で青沼、草野兩町村長の挨拶に次ぎ出石總務部長

平町近邊は縣下の主要地なれば縣でもこの問題に對し力瘤を入れてゐる忌憚なき意見の交換を聽いた上圓滿に時期を失する事なく實現を圖りたいものである

と述べて座談會に移り、大体前日平窪小學校に開かれた總談會での質疑應答を主体に

一、市制實施後に於ける施設並に財源 二、平窪平の兩町村に介在する好間村川中子、關の上部落の合併方針 三、平町の平窪村に對する合併理由等を提げて平窪村の質問に對し總務部長を中心にした平町側の應答あり結局未た村民間にも徹底しない處があるから平窪八大字で夫々平町代表を招いた部落懇談會を開いた上確固たる態度を決する事に話しが纏り同七時半會を閉ぢた

舊盆極貧者に 救ひの手！

平町助成會活動

平町助成會では既報の如く舊盆に際して極貧者を救濟する事となり過般來各區から該當者を取纏め中であつたが此程纏つた總戸數八十二戸、この家族數三百九名で今二十六日午後一時からの評議員會で給與額等を協議したが大体一名當り五十錢である

町内で多いのは何と云つても場末の長橋町十一戸三十一名、鎌田の十戸四十三名、並町が六戸十七名である

。。。。。。藤本内勤出席 縣下各警察署衛生主任會は來る二十八、九の兩日縣會議事堂に開催されるが平署から藤本内勤が出席する

東北振興株拂込

昨日七十七銀行へ 全額に近い五萬七千圓

七十七銀行平支店扱に係る東北振興、同電力兩會社株申込み八千五百株に對して配當された四千七百五十株二百卅五口の第一回拂込みは昨二十五日を以て締切つたが、各方面の拂込成績頗る良好で一株證據金共十二圓五十錢、此の金額五萬八千八百圓中五萬七千圓が拂込濟みとなり、殘額も今朝來郵便にて漸次到着しつゝあるので期間内殆ど全額拂込み濟みの狀態である

五犯男騙る

あす平區で公判

湯本町日渡無職窃盜詐欺前科五犯赤坂幸一(三七)が去る十四日新潟刑務所を出獄早々十七日夜内郷村宮字蛭子料理店つたや方に登樓酌婦木下きい子(二八)から一寸の約束で銀時計、パラソル等を借り受け翌十八日湯本町實海質屋日野利春方に入質費消した外二、三の詐欺を働いた事件は明二十七日平區に於て香西判事係り氏家檢事關與公判開廷

。。。。。。防腐劑混入にお灸 江名町江名字北町蒲鉾製造販賣業佐藤巳之藏(四八)同南町同業星廣太郎(五五)は製品に禁制の防腐劑硼酸を使用した事東京市京橋で發覺、同南町中田平次(四〇)は同樣使用して水戸で探知、此程平區から何れも罰金二十圓に處された

合併問題を俎上に (2)

平、平窪懇談會概要

〔平窪松本〕各方面から觀て縣の斡旋による合併は困難だらう、それに市農會となるより現在の村農會の方が村の事情と合致してよいと思ふ

〔井上〕市農會となれば豫算も多く計上されて仕事の上にも都合がよい、先程市制が實施されゝば純農村が破壞されると云はれたが平町内にも北目、鎌田等相當農家の多い區域はあるが決して破壞されてゐない

〔野崎〕十年の永い年月を要して政治的に合併された村があるが今では市の施設に感激して居る（先洪地幅田村の例を引く）こんな點から見て平窪との合併も決して難くないと思ふ

〔井上〕現在部落所有の財產は市制が施行されてもそのまゝでよく、郵便物の集配等に關しても新に一局が設けられ、これも文化生活の一つである

〔諸橋久〕農會關係から見ても平窪は郡下の模範であり、年々郡農會を通じて縣農會から補助金が交付されて居り、市農會になれば直接縣農會から補助されて活動の上にも幾多の便宜が齎らされる

〔松本〕農會費が多ければ發展すると云ふが、それには幾多の弊害が伴ひかへつて惡い結果になるやも知れない

〔多田井〕農村の工業化が叫ばれて居る今日でもあり平町農會の如きは商工業者と提携して圓滿に行つて居るが平窪村の農村經營の方針は如何

〔松本〕平窪村を中心として觀るならば都會化せず明るい純農村を保つて行きたいと考へて居る

〔馬目雅〕農村は精神的が先づ第一だと云ふが現在の情勢等から見て經費と精神方面が相俟つて初めて農村の進むべき道が開かれると思ふ

〔松本〕然し農村には物質によつて解決出來ぬものが多い、或程度迄の費用は勿論必要だが過大の費用は寧ろ避くべきであらう

〔鈴木光〕現在では純農村として立つて行くのは困難である、平窪は平町に最も接近した村なれば漸次『平町色』に染つて行くのは當然の事であるから速に合併してドシ〳〵生產品の處理を講ずべきである

稅額の增加に反し 一人當り負擔が減る

興味ある地方納稅現象

石城郡下に於ける昭和十年度分の各種稅金は國稅三十九萬千二百七十一圓、縣稅四十九萬五千六百十八圓、町村稅八十四萬四千七百九十八圓、合計百七十三萬千六百八十七圓で前年度に比し冷害による地租免除の關係で本稅及び附加稅少許の減少軍事インフレに因る一般經濟界の好轉に伴ふ所得稅及び同上附加稅等の增加により差引七萬二千三千圓の增加を示してゐるが、之れが一戸當り及び一人當り增減左の如く其間自ら地方經濟界の消長を物語ると同時に稅額の增に反し一戸乃至一人當りの減少は戸口の增加に因るものと觀て大差ない筈である

（一戸當）

	十年度	增△減
直接國稅	九、一四五厘	△〇四五
府縣稅	一一、五八四	△一、一〇四
町村稅	一九、七四六	二二二
國稅附加稅	九、七五四	△九六七

（一人當）

	十年度	增△減
直接國稅	一、七一四	二一
府縣稅	二、一七一	△一六六
町村稅	三、七〇一	一〇四
國稅附加稅	一、八二八	△一五〇

四倉繭市場開く

御祝儀値四圓六十錢 芳しくない第一日取引

御祝儀値五圓台を豫想されつゝ昨二十五日蓋開けした四倉繭市場は小川、大野並に双葉郡大久村方面から出荷二百三十貫あり、系の相場下落から豫想に反して高値四圓六十錢に止つた

安値四圓 貫馴四圓三五錢 掛目三四

。。。。。五丁目に賊 平町五丁目砂糖問屋皆川喜一方に二十六日午前四時頃賊侵入女型クローム腕時計一個、現金一圓餘を窃取され目下平署で犯人搜索中

七夕を送つて 今度はお盆仕度

慌だしい行事暦

前後三日三晩に亘つて無上の耽美を滿喫した七夕を送つたら、もう何時の間にか爲盆月の十日が忍びやかに近づいてゐた。あと中二日でお盆と云ふわけ、各戶では暮れと掛け向ふきまり時とあつて上半年の決濟やら中元の贈答やらで何となく追はるゝ如き氣忙しさに置かれてある。盆氣分の中心をなす村々のジャンガラ念佛はより洗練された鉦皷術の高揚に思ふ存分の跳躍を意氣込み、過般來熱心に練習を續け、昨今は最後の五分間に大馬力をかけてゐる、爽涼の夕風が桑の葉を鳴らす頃はひ彼方の杜から流れて來る野趣掬すべきジャンガラの交響樂に盆愈々近きを肯かしめられる

風紀を紊しちやならん！

南町闇の世界に 平署の目が光る

最近『南町街』の風紀が紊れ近くは舊盆に際して外來客も入り込むので平署では二十四日營業者三十三名を會議室に招集、種々訓示し今二十六日は午後二時から內郷村綴劇場に同村の料理業者二十名を招集同樣警告を發した

尙去る二十二日錦村大倉の青年を引きづり込んだ平町料理店第一新樋方酌婦緒形シヅ(三三)水澤サツ(二九)の兩名は何れも科料十圓を言渡された

浮氣な三十女

『貧乏世帶は嫌や』と 紅い灯に憧れて出奔

宮城縣亘理郡坂元村安部元實妻ちさ子(三九)は去月二十一日夜六才の子供と中氣の母を殘し『貧乏世帶がいやになつた』との置手紙を簞笥の抽斗に入れて家出したが、郡内のカフエーに住込んだらしいからと二十六日夫から平署に搜索願

鐵砲丸男

田村郡要田村熊耳佐藤嘉尉(三八)は昨年七月好間村椎木平米久忠三郎方へ出稼ぎに行つてくると飛び出したまゝ音信不通になつたので今二十六日妻タカから平署に搜索願

郡下の基準として 夏井、湯本を調査

平稅の土地賃貸價格更訂

平稅務署に於ける郡下四十七萬筆の土地賃貸價格は過般の署長會議に於てその大綱が決定され先日來本格的調査に入るべく準備中であつたが、愈々明二十七日高屋署長以下署員十二名紺野局筋の一行十四名が夏井村管波に出張、役場員及び當該區長立會の上農村方面に於ける基準調査を行ふを皮切りに翌二十八日は湯本町に於て市街地の同上調査を遂げて管下の均衡を保つ資料に供する事とし來月上旬より各方面一齊に之れが調査に着手する豫定であると

石城の水の傳說

磐城民俗研究同志會

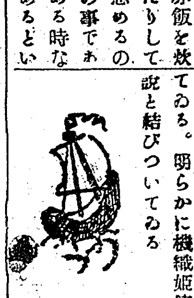
(3)

三、蛇婚傳說

△蛇が淵 好間村に蛇が淵といふ所がある。蛇岸、蛇岩などいろ〳〵に書く。こゝに蛇が住んでゐた。好間川の流が二岐に分れてゐるその中の低い川原に家が一軒あつてどんな洪水でも水は家に上らないが昔は水が出る毎に流されてはかり居た。母[illegible]嘆息して家が流されずに濟むならば三人の娘の中一人は淵の主にやつてもよいのに、と或時何氣なしに獨りごちた。この時から毎日の樣に若侍が訪れては、水難は免かれるやうにするからと言つて娘の一人を欲しがつた。一方娘も時々居なくなるので不審を抱いた母親はあとをつけて見ると、淵の傍に、大蛇がぐる〳〵卷いてゐる中に坐つてゐた。娘には若侍の姿に見えたことであらう。母親は驚き歸つたが、若侍の來訪はなほ止まず、母は遂に娘の希望を叶へてやつた。幾日か後、娘達が宿りに來たその夜、私の姿を覗かないでといふ願をきかず恐つかなびつくり覗いた母親は二匹の蛇体を見て肝をつぶした。娘は姿を見られた事を悲しんで再びお目に掛かれないからといつて、形見に片方の下駄と鱗一片を殘して去つた

又たこんな風に傳へてゐる。[illegible]をくれて後の或る晩父親は、娘が淵の岩の上で髮を洗つてゐるのを夢に見た。覺めて見ると枕頭に三反の毛織物があつたが、大蛇のひげで織つたものであつた。端の方に、この家に何か祝事のある場合、之をかの淵の神樣に供へると百人前のお椀を借りる事が出來るからとの意味が記されてあつた。それから大變重寶な思ひをして居たが、三度目に借りた時、椀の蓋を水に流し失つて了つたのでそれからは反物を供へてもも早や效果がなくなつた。反物を見るのも何でなく[illegible]しいやうな氣がして來たものだから、占つて見ると、反物の祭りをよくして與れぬからだ、近くの龍門寺に納めて祀れとの事だつたので、その通りにした。龍門寺の井とこの淵の水は續いてゐると考へられてゐる。今に至るまでこの淵の家のみは洪水の時にも浸水した事がない。淵の傍に小祠があるが、洪水毎に赤飯を炊いたり團子を供へたりして娘の靈や水の神を慰めるのを例としてゐるとの事である。そして洪水のある時などは夢に知らせがあるといふ。

この話は農夫が旱天の時雨を乞ふ際に起つた話とし又は蛇は僧に化けたり、或は後になつて娘が行者の姿となつて現れたり、いろいろの形式をとつて語られて居るが、最後のは行者の姿の娘が父母に對して自分は現世のものでない、龍宮の使者で機織姫であるといつてゐる。明らかに機織姫傳說と結びついてゐる



同僚の貯金を横領

湯本の坑夫檢擧

湯本町八仙、入山炭礦八仙寮坑夫、岩手縣東磐井郡澁民村生れ相川次郎(二九)假名)は去る二十一日同宿の須藤英光所有の百八圓記入郵便貯金通帳を窃取、印鑑を盜用、湯本局から五回を拂戾したこと發覺平署に檢擧された

取調べの結果去る十八日にも同僚の小山富作の郵便貯金を窃取同じく三圓を拂戾した外前後數回に亘つて同僚の現金、衣類を盜み出したことを自白したが同人は昨年一月ごろ郷里に於て旅館の番頭をしてゐた時も客の枕探しをなし起訴猶豫になつてゐたことも判明した

四倉の火事

二十五日午後九時十分頃四倉町大字新町字戸ノ内小林滿方より發火同三十分同家一棟を全燒して鎭火した、損害約三百圓餘原因は焚火の不始末

二十七日（小名濱測候所發表）

日出 五、〇五　月出後 二、一五
日沒 六、一二　月沒 ―
滿潮 後九、四〇　干潮前 五、一〇

舊七月十一日 木曜 辛巳 大安 收 斗宿 新八月二十七日

諸判定總本部 東京市本郷區湯島四丁目 高島易斷總本部 神宮館

▲一白 一てきの玉のあせし一つぶの水となる働甲斐あり▲二黑 果報はねつて待てと焦らず英氣を養ふべき日▲三碧 先走る時はつまづきあり徐々と進むが安全▲四綠 他より邪魔せらる、事あり交際に注意されよ▲五黃 大望を企てず分に安んぜば相當の金祿あり▲六白 實力本位に進むべし投機的の事は失敗あり▲七赤 進んで失敗せんより退て安全を期すべし▲八白 けう木は風にゆられあし根元のゆるまぬ樣注意▲九紫 福祿備り家內圓滿の吉日温和著實たり

御禮

昨夜近火の際は御叮重なる御見舞の辭を辱ふし難有奉深謝候混雜の砌り御尊名御伺ひ洩れ等可有之候段乍失禮以紙上御厚禮申述候

八月廿六日

四倉町字戶ノ内 小林勝人

青光院新盆に相當り候處誠に乍勝手提灯其他供物等御贈與の儀御辭退申上度右不惡御了承願上候

青沼鋒太郎

父大輔儀新盆に相當り候へ共時節柄提灯其他供物等一切御辭退申上度甚だ乍勝手惡しからず御願申上候

平古鍛冶町 矢吹大一郎

亡兒政雄儀新盆に相當候處誠に乍勝手提灯其他供物等固く御辭退申上度謹告候也

平町三丁目 大谷久藏

母儀永々病氣療養中の處藥石効なく本日午後四時死去仕候間此段及通知候也

追て葬儀は來る廿七日午後二時自宅出棺實德院に於て佛式相營み可申候

昭和十一年八月廿三日

植田町

喪主 鷲 清昇

親戚總代 織內司馬太郎